

平成 21 年 4 月 5 日現在

研究種目：若手研究 (A)
 研究期間：2006 ～ 2008
 課題番号：18682001
 研究課題名 (和文) 光村利藻の刀装具蒐集に関する基礎的研究—そのパトロネージの解明のために
 研究課題名 (英文) Basic research of Mr. Risou Mitsumura' s sword guards collections ~about the role that he played as a patron~
 研究代表者 内藤 直子 (NAITO NAOKO)
 財団法人 大阪市文化財協会・大阪歴史博物館・学芸員
 研究者番号：70270725

研究成果の概要：

刀装具蒐集に関する基礎情報として、光村氏が心血を注ぎ完成した『鑿廻花』のデータベース化を行うと共に、作成に当たっての収集情報を書き留めたメモ集を報告書に再録した。加えて、これまで注目されていなかった幸野楳嶺門下の画家との交流及び収集作品の特定を行うための基礎資料を収集し、報告書中にまとめた。今回の研究では、彼のパトロン活動が特に活発であった時期を明治 30 年代後半期に特定できるのではないかとという仮説を提起するに至るとともに、研究過程では新出資料の発見や、既出資料の新たな側面を見いだすに至った。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2007 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,700,000	1,110,000	4,810,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：工芸、金工、刀装具、近代工芸

1. 研究開始当初の背景

大阪の博物館に従事する者として、これまで文化的にほとんど顕彰されてこなかった大阪生まれの実業家・光村利藻の文化的業績を明らかにし、その志を解明することで、大阪の文化史に一石を投じることを念頭に置いた。

その主たる目的は、大阪生まれの事業家であった光村利藻の刀装具蒐集に関する基礎データを収集することであり、全国に散逸した作品や下絵の情報収集を行うことであった。加えて、彼の代表的な著作として知られる『鑿廻花』全 4 巻の分析とそのデータ化も実現したいと考えるところであった。

2. 研究の目的

まず刀装具蒐集に関する基礎データを集める、そしてその他のパトロンとしての支援関係を明らかにすることで、彼の人物像において文化貢献の実態を示すことを目的とした。

特に、光村氏による注文銘を伴うかどうかという点、およびその製作時期に注目し、光村氏の金工作家へのパトロネージの実態をできる限り明らかにすることを目的とし、最終的には、相撲のタニマチでもあり、幅広く芸能・花柳界などの文化を支えてきた光村氏の人物像において、刀装具蒐集および金工作

家へのパトロンの実態を位置づけて考察する事を本研究の最終展望としたいと考えるところであった。

また研究の過程で、パトロンとしての光村氏姿が顕著なジャンルとして、近代日本画の画家への支援という視点が浮上したため、以降、ジャンルとしては刀剣刀装具の蒐集・作家支援の問題と、絵画蒐集および画家への支援の問題を並行して調査を行うことで、パトロンとしての光村氏の人物像をより鮮明にすることを目的とした。

3. 研究の方法

研究方法としては主に以下(1)(2)の2項目を柱とし、蒐集された刀装具の基礎資料としての性格の強い『鑿廼花』やその他史料のデータ入力により、関連情報を集積し、最終的にその成果の公開に至るという流れで行った。調査活動は番号順ではなく時宜に応じ、全体的に推進した。また、データベース化など、単独で行うことが時間的に困難な作業については大学院生の補助を得てこれを行った。

- (1) 所蔵家・所蔵機関への刀装具作品調査および絵画作品調査
- (2) 光村氏の周辺人物・収集作品に関する文献・資料調査
- (3) 『鑿廼花』のデータベース化
- (4) その他同時代資料のデータ入力
- (5) 成果報告書の作成

4. 研究成果

光村利藻の質と量の豊かさは、彼のコレクションの最大の特徴であるが、そのもうひとつの特徴は、これだけの質と量のものでありながら非常に短期間に形成されまた短期間に四散した点にある。

今回一連の調査を行う過程で、彼の美術品蒐集に於いて、特に明治三十年代後半から明治四十年代前半にかけて、大変密度の濃い活動が為されてきた姿が浮かび上がった。

また、蒐集のみならず、その集積を愛好家に披露する活動も活発に行われていたことを示す新出資料の掘り起こしも行った。その他、関連資料のデータベースを作成し、また、成果の主要なものについては、研究成果報告書を作成し、その中に収録した。

その概要は下記の通りである。

(1) 刀剣蒐集と刀剣会の開催実態の解明

明治三十年代というのは、明治九年の廃刀令以降、需要が下火になっていた刀剣類が再び蒐集の機運を高めた時期で、明治三十三年

に、国内初の本格的刀剣研究組織である中央刀剣会が発足するなど、明治以降の刀剣蒐集の黎明期であった。旧家・名家が一家の維持のために道具類を手放し始めるのもこの頃であり、その意味で、光村氏が蒐集に着手した時期は、多くの作品を入手するための好機であったといえる。

光村氏が本格的に刀装具蒐集を始めたのは明治三十年、同氏二十才の時で、その後明治三十五年、三十六年の少なくとも二回、いずれも六月に、後述するところの大規模な刀剣会を開催できるだけの蒐集品が存在しているところから考えて、少なくとも五年の間に何百という数の蒐集品が成立していたことになる。

この光村家の刀剣会について本研究では当時の刀剣雑誌類を通覧し、その一部で紹介されていることを確認、報告書に原文を記載した。その中には総ての展示物の名称が記されたものや、列席者に関する情報を記した物もあり、重要な資料である。

また、一次資料として、大阪の実業家・芝川又右衛門宛の刀剣会招待状を発見した。この招待状により、鑑賞会の翌日に、別途鑑定会が開催されていたこと、招待の時間帯が招待客によって異なっていた可能性があることなどが判明した。

また、刀剣会での陳列に於いて使用されたと考えられる小柄箆笥を複数発見した。厩大な作品を管理していた光村家ならではの威光を残す好資料であり、こちらも報告書で概略を紹介した。

なお、補足ながら、明治大正期には複数の刀剣雑誌類が刊行されており、その中には刀剣研究にとって有益な情報も含まれている。実際、研究代表者は、本研究の過程で別件の研究(月山貞一関係)に関わる重要な史料を発見しており、その成果は今年度の研究紀要に掲載する予定である。

このように、明治大正期の刀剣雑誌類の情報整理は刀剣史・美術史にとって有益であることから、本研究では、研究の補助的な意味から、可能な限り明治大正期の刀剣雑誌を購入し、その目次タイトルを入力作業を行った。この研究でなし得たのはまだ一部のみであるが、今後目次タイトルの集積量を増やすことで、利用価値の高いものとし、広く研究者の益するところとしたいとの展望も併せ持っている。

(2) 刀工・彫金工へのパトロネージ解明

明治三十年代後半になると、利藻は、古作の蒐集では飽きたらず、彫金家や刀工への注文制作を行うようになる。大阪の刀工・月山貞一への注文制作を例に取れば、彼は連年月山貞一へ作刀を発注しており、その作品は、

後年の売り立て目録に掲載されている。光村利藻の需めによりこれを造るといふ長い為銘（注文者の名前を入れた銘）を入れさせ、細緻な刀身彫刻を入れさせた入念作である。

研究報告書では、月山家側で語り継がれている光村利藻像と、彼の実際の行動、そして残された作品からの検証や、彫金家・海野勝眠らへの支援のあり方を検証することで、光村氏が単に資金的な意味だけのパトロンではなく、伝統工芸作家にとって最も貴重な機会—古作の実見と模倣の機会—を与えてくれる、「真の」パトロンであったという姿を呈示した。

(3) 下絵と彫金作品についての新知見

本研究では、下絵と彫金作品の関係に於いても新知見を得ることが出来た。

塚田秀鏡の「十二ヶ月図小柄」と「波図太刀鐔」の二作品については、その下絵が島根県・和鋼博物館に所蔵されているが、文献調査で浮上した「光村家反古集」にそれらに関する秀鏡の書翰が収録されていることを発見し、柴田是真研究の成果と付き合わせることで、「十二ヶ月図小柄」の下絵の元となる是真画が、是真研究で知られるところの明治十六年の「十二ヶ月図十二幅対」である可能性が濃厚であること、また、この小柄自体は、明治四十三年の日英博覧会に出品された塚田秀鏡作「十二ヶ月図小柄」（清水三年坂美術館所蔵）となんらかの関連を持つことなどが想定されることなど、同時代の美術工芸界の動向にもつながる成果としてこれらの知見も報告書に記載した。

(4) 絵画蒐集と画家との親交について指摘

今回の研究で最も大きな成果のひとつとして、竹内栖鳳らとの親交と作品蒐集の事実関係の裏付け作業がある。竹内栖鳳らとの親交は、これまで利藻伝に記された以外、殆ど指摘されてこなかった事実であるが、今回の研究により、竹内栖鳳の代表作を含む、数百点のコレクションが明治三十年代に形成されていたことを、同時代の新聞記事、雑誌記事などの検証により明らかにすることが出来た。

また、この調査過程では、東京文化財研究所が所蔵する某家売立目録のうち3冊について、光村家売立目録を含む物であることを、同時代資料などとの照合により明らかにすることが出来た。

また、栖鳳の代表作である「羅馬之図」（広島・海の見える丘美術館所蔵）について、その名称の付けられた由来などについて、報告書中に指摘した。

その上で、これら三回に及ぶ売り立てでは、

栖鳳の代表作と考えられる重要作品が殆ど出ていないことを指摘し、利藻が、単に漫然と蒐集していたのではなく、作品の意義についてよく理解した上で蒐集、また手放していた姿を認めることができるとの見解を呈示した。

(5) 『鑿廼花』正編のデータベース化

『鑿廼花』（正編全四巻）は、光村利藻の印刷出版物の代表ともいえる資料であり、当時の刀装具蒐集の実態を知るための基礎資料である。昭和四十六年に復刻版が出されたことで一般に情報が普及しているものの、復刻版の画像は原書に比して不鮮明という難があるうえ、豪華本ゆえの、取り扱いの煩わしさもあった。

本調査研究に於いては明治発行のオリジナル本（大阪・個人蔵）を原拠とし、画像を600dpi、tif形式でスキャンし保存した後、各画像をサムネイル用に100dpi、jpeg形式に変更したものと、復刻版を元にした各作品の「巻数」「通し番号」「所蔵者」「作者」「部位」「画題検索」「銘」「下地」「彫」の各項目につき、文字情報データを入力し、データベースソフト・ファイルメーカーを用いてデータベース化した。

これにより作者名、所蔵者名（当時）や画題名、技法などによる検索が可能となった。

今後データベースを所属する博物館のホームページで一般公開できるよう、内容の再チェックと環境整備を行う予定である。

なお、エクセル表で一覧すると、作品は後藤一乗を筆頭に京金工の作品が多く、所蔵者は龍獅堂が全体の過半数にのぼることが一見してわかるものとなるなど活用範囲やその意義は大きい。

なお、このデータベースの作成に当たっては、大阪大学大学院寺澤慎吾氏の補助を得た。

(6) 関連資料の報告書への収録

既述の通り、同時代の刀剣雑誌や新聞等の資料には、これまで未検証の光村家関連情報が掲載されており、それらの雑誌等の中には現存数が少なく一般で閲覧することが難しい雑誌類が多く含まれているため、今回作成した成果報告書には、それらの資料類のうち光村家の動向に関連する資料を出来る限り収めた。

これらの資料の中には、刀装金工の略歴を調べ、今日の刀装金工事典の典拠にも多く採用されている『鑿廼花』金工略伝作成のための基礎資料を列挙した「光村家反古集」を含んであり、今後の光村利藻研究の基礎資料となるのみならず、幕末明治期の刀装金工について研究する上で、豊富な情報を提供するこ

とが可能であり、本報告書の活用範囲は光村利藻研究に限定されない広域に及ぶと考えられ、その意義は高いものとする。

以上の成果の概略をまとめると、光村利藻の刀装具蒐集に関連した事蹟の確認作業と新知見の呈示、画家との交流及び作品収集に関連した事蹟の確認作業と新知見の呈示、基礎資料としての『鑿廻花』のデータベース化、同時代の刀剣関連・光村氏関連資料の集積と公開、その過程に於いての新知見の呈示、といった諸点において、大小さまざまなが複数の成果を上げ、その中には刀装具研究のみならず、多方面への影響を与える知見の呈示も含んでいたと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

(1) 内藤直子「明治三十～四十年代の光村利藻とそのコレクションー大阪での動向に注目してー」『科学研究費研究報告書』、3頁～11頁、2009年3月、査読無

(2) 内藤直子「俣野景孝筆録『光村家反古集』について」『科学研究費研究報告書』24頁、2009年3月、査読無

[その他]

講演 内藤直子「近代大阪奇才伝」(なにわ歴博講座 2008年6月6日 6:30～7:45 於大阪歴史博物館講堂)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

内藤 直子 (NAITO NAOKO)

財団法人 大阪市文化財協会・大阪歴史博物館・学芸員

研究者番号：70270725

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：